
人体模型と海の色

椿 によき

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

人体模型と海の色

【Zマーク】

Z3585C

【作者名】

椿 ひよき

【あらすじ】

普通じゃないけど普通っぽい女の子模祁と、普通っぽいけど普通じゃない僕の、普通そうで普通じゃないお話。

これは、普通っぽいけれど全然普通じゃない僕と、全然普通じゃないけれど普通っぽい模様が繰り広げる、甘くも切なくもない物語。普通じゃない僕の彼女は……もちろん普通の女の子じゃない。それでも大切だった。

大好きだった。

やつぱり僕って変だと思う。

だつて彼女は

午後。海の風が、頬を撫でる。

僕の通う学校は海沿いにあるので、夏はそれなりに環境がいい。涼しいし、なにより空気がとても綺麗なのだ。

ただ、残念なことに今は冬。

真冬真っ盛り。

「まつたく、やつてらんねえよな」

下校の支度をしながら、隣の席に座る金子がいきなり僕に寄り掛かってきた。

「何をだよ……ていうか邪魔」

虫を追い払うように手をひらひらさせて、金子を押し退ける。冷たいなーと金子が笑い、うるさいなーと僕は苦笑した。

明日も国語があるので、ノートだけ持ち帰ろつ。などと考えながら自分のカバンに教科書を詰める。その時、嫌でも目に入るのは置き勉常習犯の軽そうなカバン。

「おい金子、たまには教科書を持ち帰つたらどうだ?」

「いやいやー一度手間じやん? 教科書持ち帰つて、また持つてく

るなんてさ。ま、お前には分からぬだらうけど」

「確かにお前のような超がつく駄目人間の思考は理解しかねるよ」「僕はカバンを掴むと、まだクラスメイトがぽつぽつと残っている教室を廊下に向かって歩いていった。

「じゃ、また明日」

黒板付近に立っていた桐山さんに、胸の辺りで小さく手を振る。

「おうひー！ また明日なー！ わあて今日はサッカーでもすつか！」

手を振り返しながら、桐山さんは教卓を漁る男子に誘い掛ける。それを聞き、教卓に群がっていた男子たちが一斉に振り返る。

「賛成！ さすが学級委員、放課後にいつもの公園でいい？」

「じゃあ四時頃なー！」

真冬だというのに、元気な人たちだなと思う。そんな風に感心していると、いつの間にか僕の後ろに立っていた金子が

「さあて今日はゲームでもすつか！」

と言い出した。

少子化だというのに、あまり未来で役に立たなそうな子供だなと思う。ある意味感心。

「僕は絶対にやらないからな」

なぜか僕の肩に手を置いている金子に、一応忠告をしておく。一瞬にして金子の表情が不満に変わった。どうやら落ち込んだようだ。ただがゲームでここまで落ち込めるとは、僕はまた感心した。まあそれは、どちらかといふと绝望に近い感心だったが。

「放課後に俺の家、時間は四時頃なー！」

桐山さん、その他の男子たちとあまり変わらない台詞なのに、どうしてこうも暗あーく嫌な台詞に聞こえるのだろう？ しかも僕は知らない、と言つたはずだ。ちゃんと『絶対に』もつけた。なのに、なぜだ？

なぜ僕は巻き込まれているんだ？

「社会の宿題が夏休みの勉強に匹敵するくらい大量に出てるから無

理……大体お前みたいに宿題を忘れたからって『俺の宿題をそう簡単に見せるわけにはいかんのだー、はつはつはー』とか言える人間じゃないんですよ、僕は

「お前の真面目っぷりは尊敬に値するよ」

「それはどうも」

なんの繋がりも無いのに、だからうちでゲームしようぜ、と言つてくる金子を全力で振り払つと、僕は逃げるようにして廊下を走つていった。

そして階段を下りようとした、ちょうどその時。

「ちょっと仁科、仁科っ！ 手伝つてほしいことがあるの。もしかして今忙しい？ 忙しくても簡単な仕事だからやつてもらうけど」先生の声が、僕の動きを止める。一步踏み出していた右足を引いて、振り返る。

「いえ、人類代表駄目野郎から逃げてただけですから。とにかく忙しくはないですよ？」

「んふふふ……先生ねえそれが誰だか分かつてしまつたわよん」

「わよんつてなんですか。まったく、気持ち悪いですね。それで本題は？」

教えてほしいうー？ ともつたいぶつて、十秒くらい間を空ける一富

潮先生。ちなみに彼氏募集中の一十五歳、担当は国語で僕のクラスの担任だ。

こうしている間にも宿題をやる時間が削られていく。そう思つと無性に苛々してきた。体内に溜めきれなくなつた怒りのオーラが零れてしまつたのか、先生はようやく口を開けると、さらに五秒ほど不気味に笑つてから、

「理科準備室を掃除してきてちょうだい」

人差し指をひとつ立て、耳よ腐れと言わんばかりのロリー・タボイス（痛々しいウインクのおまけつき）でそう言つた。

「待つてください。それって簡単な仕事じゃないですよね？ 明らかに。今日ものすごい量の宿題が出てるんですよ？」

「それは知っているわ。大丈夫。国語の宿題をなくしてあげるから教師として言つていいことなのだろうか、それは。しかも。

「今日は国語の宿題、一つも出でませんよ。純粹な生徒を騙す氣ですか？」

「四五の言わずに早くやる。今日はいい天気だつたわね」「疚しい事でもあるのか、先生は笑顔だったが、さりげなく話と目線を逸らしてきた。

「ところで、なぜ掃除なんかしなくちゃいけないんですか？」

「いやー先生わあ、探し物をしてたら準備室を汚しちゃつて……あははっ」

「あははじゃないです、あははじゃ！」

怒鳴る僕を置き去りにして、先生はもづもづと遠くにいた。なんと いう逃げ足……さすが人類最強駄目教師。

僕は夕日が差し込む廊下を歩き、たまには忘れ物をするのもいいかもな、と自分らしくないことを考えた。嫌な言い方をすると、現実逃避した。

「ふう。はあ

」

深呼吸をして、理科準備室に向かつた。

「どうして僕の周りには、いつも変なのがばかり集まつてくるんだろう

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3585c/>

人体模型と海の色

2010年10月21日15時54分発行